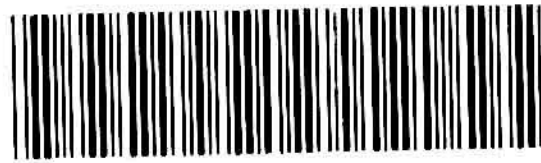


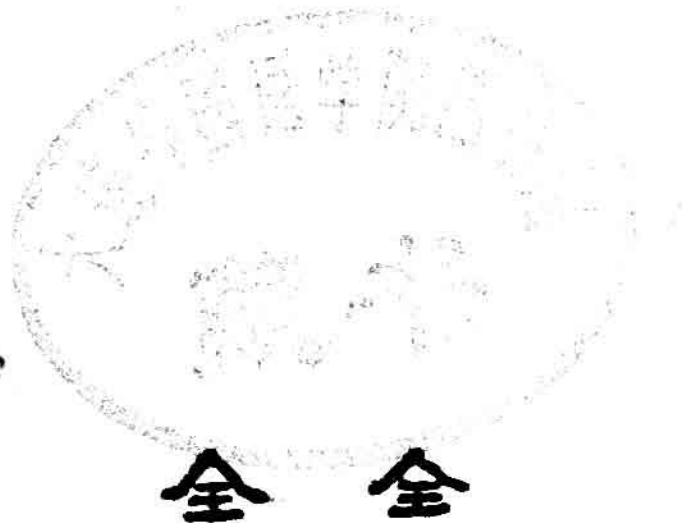


130070



日文 701721450

本 管
朝 話
醉 稻
菩 妻
提 表
紙



昭和十年七月八日印刷
昭和十年七月十二日發行

有朋堂文庫
昔話稻妻表紙、
本朝醉茗提
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京市淀橋區西大久保町三丁目二百三十六番地

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

株式會社有朋堂

代表者

印刷者兼
發行者

三浦正

東京市神田區錦町三丁目廿二番地ノ二

印刷所

合資會社
有朋印刷社

東京市神田區錦町一丁目七番地ノ一

發行所

株式會社
有朋堂

不許複製

緒言

江戸軟文學界の奇才山東京傳會、一代の賢宰相白河樂翁侯の大眞面目なる一喝に遇ひて、滑稽洒落の筆を收むるや、此度は手をかへて指を「讀本」に染めしが、時好に投ずる機轉と漸く圓熟の境に入れる文章とを併有せる彼は、「忠臣水滸傳」「安積沼」「櫻姫全傳曙草紙」等を續出して、此方面に於ても亦忽ち讀者の喝采を博したりき。是に於て更に趣向を芝居の不破名古屋の鞘當に取り、全體を芝居仕立に脚色し、當時全盛の畫工歌川豐國の插畫に花をかざりて、文化三年發販したるもの、之を「昔話稻妻表紙」とす。此書の世に盛にもてはやされたるは、中一年を隔てて文化五年の春、大坂兩座の芝居に於て、此冊子の趣向を其儘狂言に仕組みて上場せしものの頗る大當

りなりしを觀て知るべし。是實に小説の趣向が芝居に仕組まれし嚆矢なりといふ。さて芝居に於ける不破伴左衛門の着附の雲に稻妻の模様は、俳優市川才牛が創意にて、彼の「いなづまのはじまり見たり不破の關」の句に據りたるものなるが、京傳本書を綴るに當りて、又此模様を襲用すると共に、相手方なる名古屋の衣裳の模様を之に對せしめんとして工夫を費し、終に「傘にねぐら貸さうよ濡燕」の句に據りて、雨に燕の圖案を捻出したり。斯くて浪花の芝居に上場せられし以來、濡燕と雲に稻妻とは、蝶千鳥の會我兄弟に於けると等しく、不破名古屋の衣裳の模様として永く動かすべからざるものとなりしは、本文以外に於ける作者の手柄と謂ふべし。

機に投ずるに敏なる「稻妻表紙」の作者は、其の大坂の芝居に上場されし年

を以て、更に續篇「本朝醉菩提」を出せり。此書につきては、姑く水谷不倒氏の列傳體小説史に謂へる所を借用して足れりとすべし。

此の書は「稻妻表紙」の後篇なり、一休の事を中心として、其が俗傳の逸事を綴合せるものなり。抑一休の俗傳は、支那小説の「醉菩提」を翻案したるものなれば、作者はそれをほのめかしたるものにして、鈴木正三が「二人比丘尼」の大意を取りたるもの云々。

尙本書につきて、「物之本江戸作者部類」記す所の一話あり。當時に於ける作者と畫工と出版者との關係を窺ふに足るべき、興味ある物語なれば、附載して讀者の一察に供ふべし。

本朝醉菩提六卷後篇四卷共に十卷も、亦是伊賀屋の板にて、出像は豐國畫きたり。當時是等の畫工、例として、未だ畫かざる已前に其濡筆を受けなが

ら、技に誇りて畫くに遅かり。醉菩提を板するに及びて、伊賀勘屋、乞へども、
豊國事に托して敢て畫かず、まづ板元に説薦めて、羽二重の袷半折二領を
製らしめ、これを作者と畫工に贈らしむ。(其半折に京傳と豊國の花號を附
けたり)かゝる事は、歌舞妓の當場作者に此例あればと云へり。只此事のみ
ならず、或は酒肉珍菓を贈り、京傳と豊國を伴ひて雜劇しはるを見せ、或は酒樓に
登る事屢なりき。かくても豊國は猶多く畫かず、催促頻りなるに及びて又
板元にいふ様、已かく家に在りては、雜客も絶えず、且錦畫の板元に責めら
れて、よみ本の插畫は筆を把(原本)邊裏屋二軒を借りて此處に豊國を請待
し、日毎に酒飯を餽りて畫かせけるに、折柄三月の頃なりければ、豊國が又
いふ様、時は今咲匂ふ花の三月なるに、斯く垂籠めてのみありては、氣鬱し
て病を生ぜんとす。いかで墨田川邊に徜徉して保養せまくほし、といひし
を、伊賀勘屋聞て思ふ様、若一日外に出さば、再び此處に歸るべからず、要こそ

あれと思案して、さりげもなく答へていふ様、花を見まく欲し給はゞ、遠く墨田川に赴くに及ばず、吾取寄せて參らせん、とて大なる枝に花満ちたる櫻を許多あまた買取りて、そを花瓶にも樽等へも活けて、豊國の几邊に置並べ、其活花衰ふれば、取替へく見せしかば、豊國竟にせん方無くて、日毎に件の出像を畫く程に、伊賀屋は更也京傳折々此假宅に來訪して、打語らひつゝ慰めけり、此等の事は京傳の本意にあらねど、さきに優曇華物語の出像を唐畫師に誂へて後悔せしに、櫻姫全傳の作よりして豊國に畫かして、特に時好に叶ひしかば、是より豊國と親しく交りて、功を譲る事大方ならず。夫に今淨瑠璃をもて譬ふるに、畫工は大夫の如く、作者は三味線彈に似たり。合卷の臭草紙は更也、讀本と雖も、畫工の筆精妙ならざれば賣れ難し、といふにより、豊國も亦自ら許して、其功我にありと思ひしかば、是より合卷の奥半張に、畫工の名を上にして、豊國畫京傳作と署したり。既に斯の如く畫

工に權をつけしかば、豐國の恣なるを憎々しくは思ひながら、竟に諫むる事能はず、其好みに従ひつゝ、二年ばかり稍印行する事を得たれども、思ふにも似ず冊子の世評妙ならず、損する程にあらねども、初に畫工作者をもてなしたる諸雜費のいと多かりければ、竟に板元の算帳あはず、云々。

本書の翻刻に當りては、讀者の便宜を圖りて、間、假名を漢字に改め、假名遣及送假名を統一したる外、一切原本に隨へり。猶本朝醉菩提品目釋義は、原本序の次に掲げたれども、便宜上姑くこれを卷末に附せり。校訂及校正に關しては椿強祐氏を煩はしたる所甚だ多し。

大正二年九月

校訂者 武笠三

目 錄

昔話稻妻表紙

卷之一

- 一 遺恨の草履……………七
- 二 風前の燈火……………一四
- 三 胸中の機關……………二四
- 四 荒屋の奇計……………二九

卷之二

- 五 厄神の報恩……………三五
- 六 因果の小蛇……………四三
- 七 呪咀の毒鼠……………四七
- 八 暗夜の駿馬……………五四

卷之三

卷之四

- 九 辻堂の危難……………六五
- 十 夢幻の落葉……………七〇
- 十一 斷絃の琵琶……………七三

卷之五上冊

- 十二 修羅の太鼓……………九七
- 十三 靈場の熱鬧……………一〇一
- 十四 仇家の恩人……………一六

卷之五下冊

- 十五 孤雁の禍福……………一二九
- 十六 名畫の奇特……………一三五
- 十七 雪溪の非熊……………一四二
- 十八 花柳の鞘當……………一五九
- 十九 刀劍の稻妻……………一六九

三 積善の餘慶……………一八七

稻妻表
紙後編
本朝醉菩提
(卷末品目
釋義參照)

卷之一

跋羅毘
闍尊者
善惡因果序品第一……………二〇七

善惡因果序品第一 (後談)……………二三七

卷之二

迦諾迦伐
跋尊者
得失譬喻品第二……………二五五

得失譬喻品第二 (後談)……………二六七

諸迦跋
跋尊者
醉菩薩方便品第三……………二七六

卷之三

諸矩
尊者
姊妹本事品第五……………二九三

姊妹本事品第五 (後談)……………三〇四

卷之四

迦
尊者
俠客提婆達多品第六……………三二九

俠客提婆達多品第六 (後談)……………三三五

跋陀
羅者
地獄信解品第七……………三四九

卷之五

地獄信解品第七 (後談)……………三七七

成博
迦者
父母安樂行品第八……………三八八

半諸
迦者
畜生勸發品第九……………三九五

羅怛
者
處女授記品第十……………四〇一

卷之六

那伽
軍者
災禍從地湧出品第十一……………四二一

災禍從地湧出品第十一 (後談)……………四二三

卷之七

因揭陀百蟹陀羅尼品第十二	四三五
尊多羅者瓜茄隨喜功德品第十三	四四六
新尊者髮生死流轉藥草喻品第十四	四五三

卷之八上

阿氏多者赤蠅囑累品第十五	四七三
--------------	-----

卷之八下

迦尊者觸骸化城喻品第十六	四九五
本朝醉菩提品目釋義	五一九

東山八景

見わたせばひがしやまの春のけしきやぎをむばやしに吹くあ
らしは山市の晴嵐とうたがはれ河原おもてのまさごのいろは
江天の暮雪もかくやらむおもしろの花のみやこやぢしゆのさ
くらにしくはなし賀茂川のながれのすゑにゆく舟は遠浦の歸
帆かさえわたる清水寺のかねのこゑ煙寺の晚鐘のひびきそれ
しら川のすさきにつばさの散亂すは平沙の落雁ともいひつべ
しさてれうせむのつきかけは洞庭のあきののこれにはよもま
さらじさてまた漁村の夕照はつりたれてあけまきにあそぶも
のを

稲妻の

もろもろ

荷翠

不破伴五郎

見

不破の関

かじや山三

傘

かき

め

め

其角



傾城の

賢くは

柳の南

其角



傾城の賢くは柳の南

香づくし

六十一種の名香は法隆寺東大寺逍遙みよしの紅塵枯木なか川
法華經はなたちばなやつはし園城寺似たり不二のけむりはあ
やめ繁若鸚鵡斑あを梅楊貴妃とび梅たねがしまみをつくし月
龍田もみぢの賀斜月白梅千鳥や法華老梅や重がき花の宴はな
の雪名月賀蘭子卓橘はな散里丹霞はながたみ上はかをり須磨
あかし十五夜隣家夕時雨たまくら有明雲井くれなるはつせ寒
梅ふた葉早梅霜夜たなばたねざめしのくめうすくれなるうす
ぐものほり馬とかく伽羅のけぶりといのちの君はとめてもい
く夜いくよとめてもとめあかぬ